

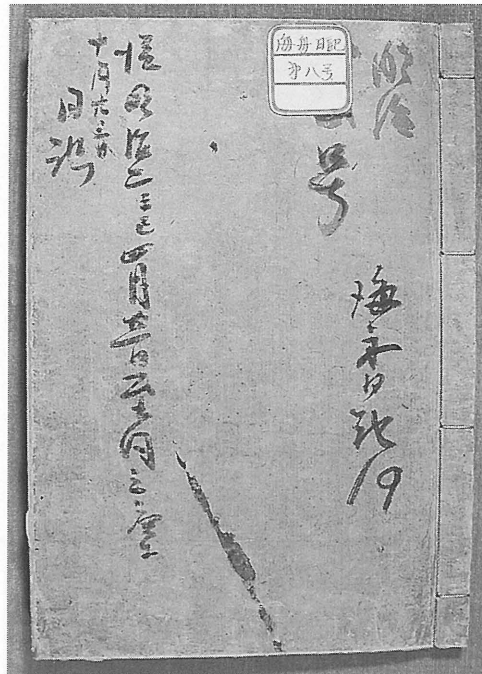
江戸東京博物館史料叢書

勝海舟関係資料

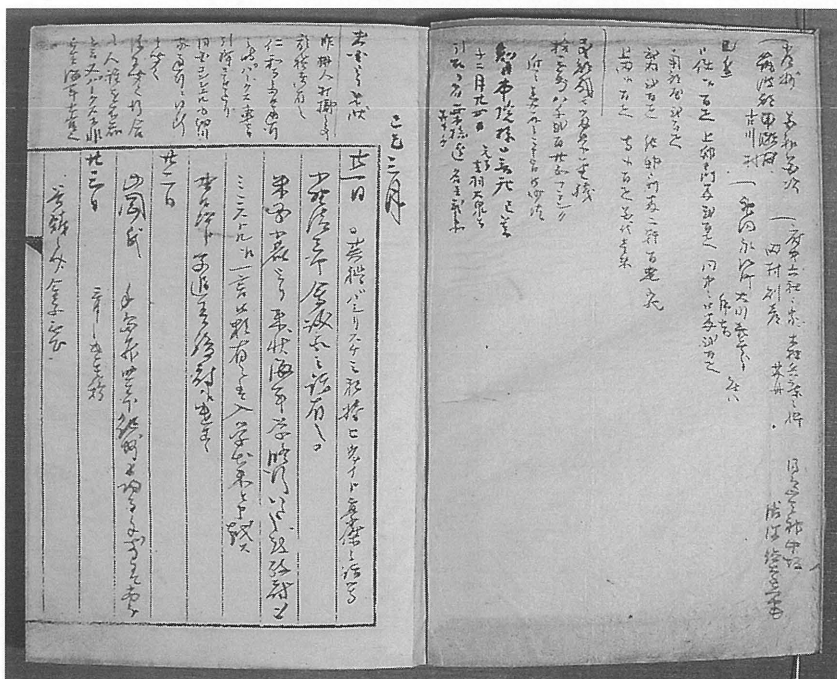
海舟日記

(四)

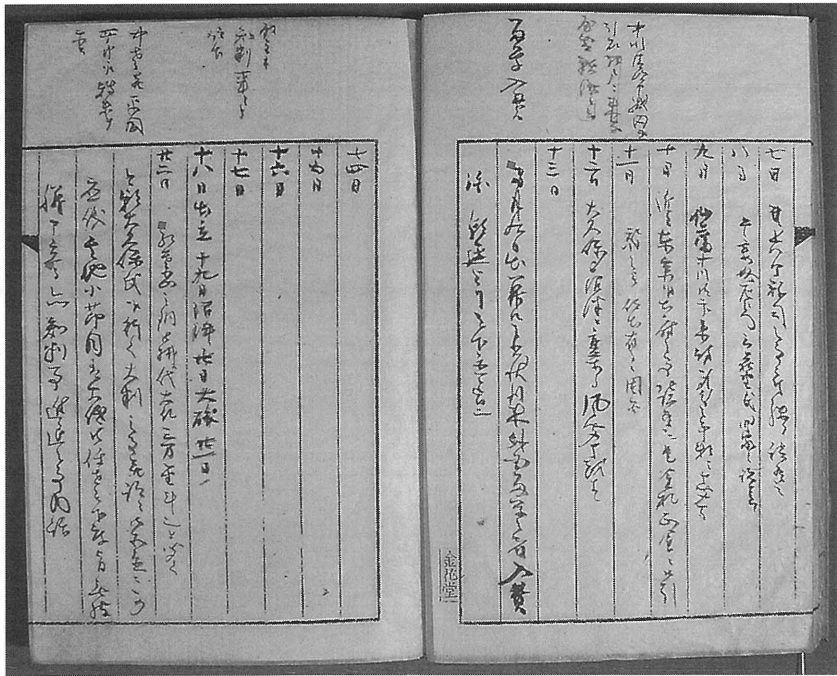
東京都江戸東京博物館
都市歴史研究室編



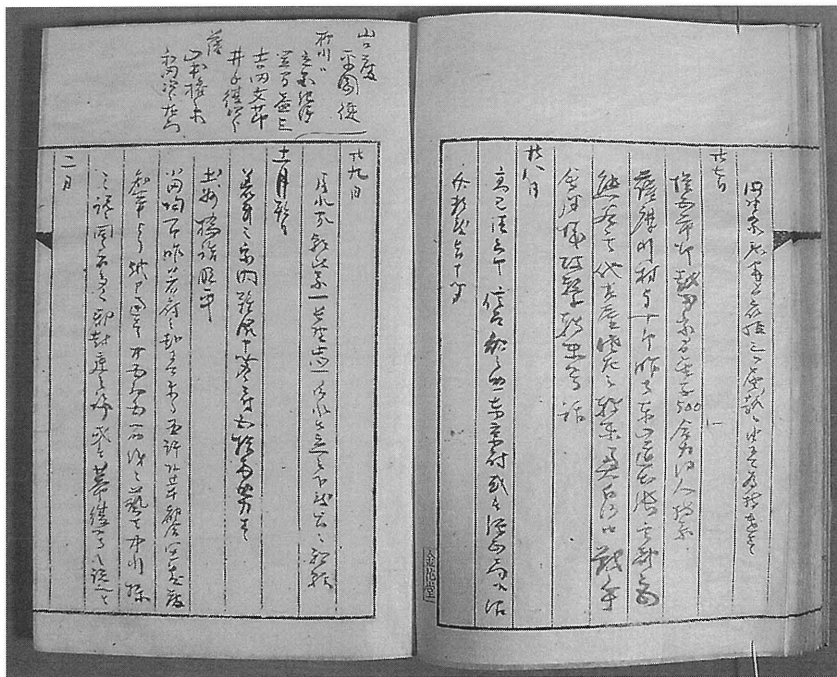
1. 「海舟日記 八」表紙



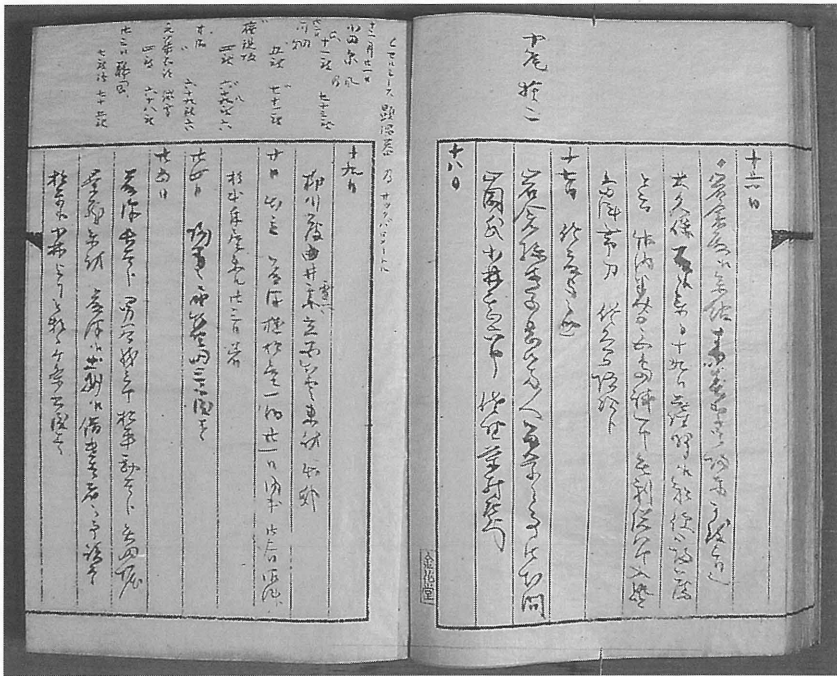
2. 見返しの書き込みと1頁



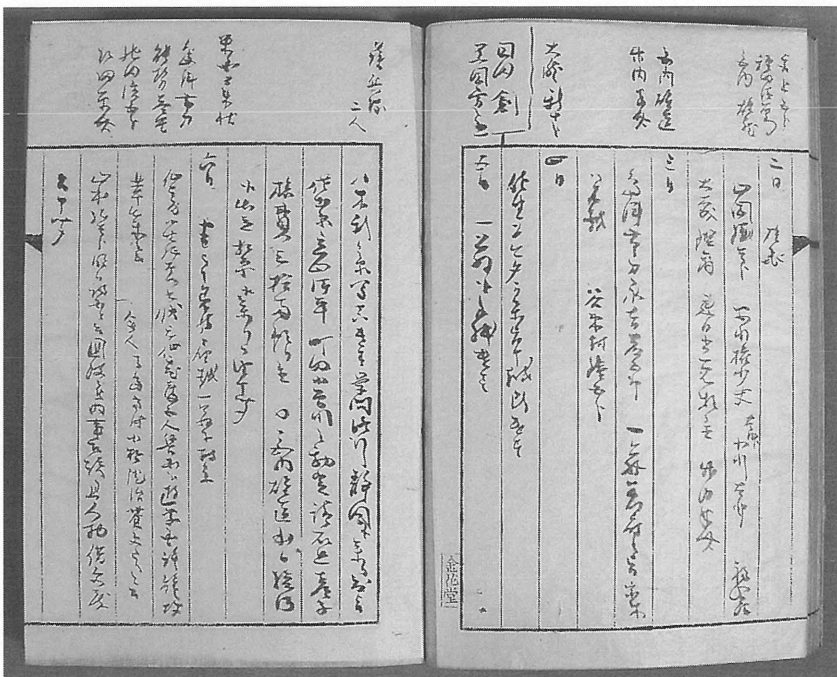
3. 明治二年六月十一日条の上欄注記



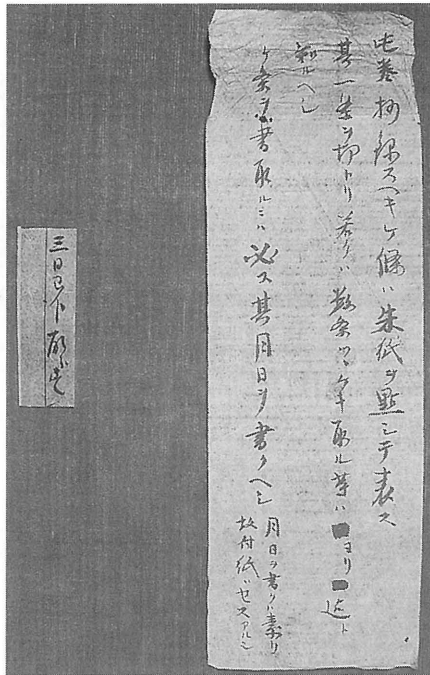
4. 明治二年十一月朔日条の上欄注記



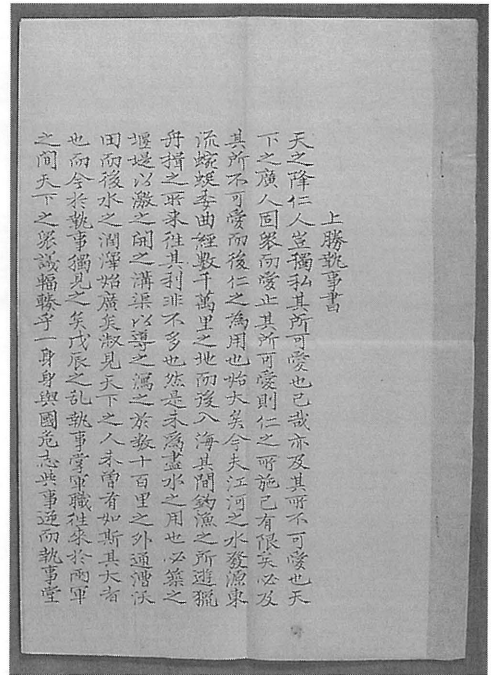
5. 明治二年十二月十九日条の上欄注記



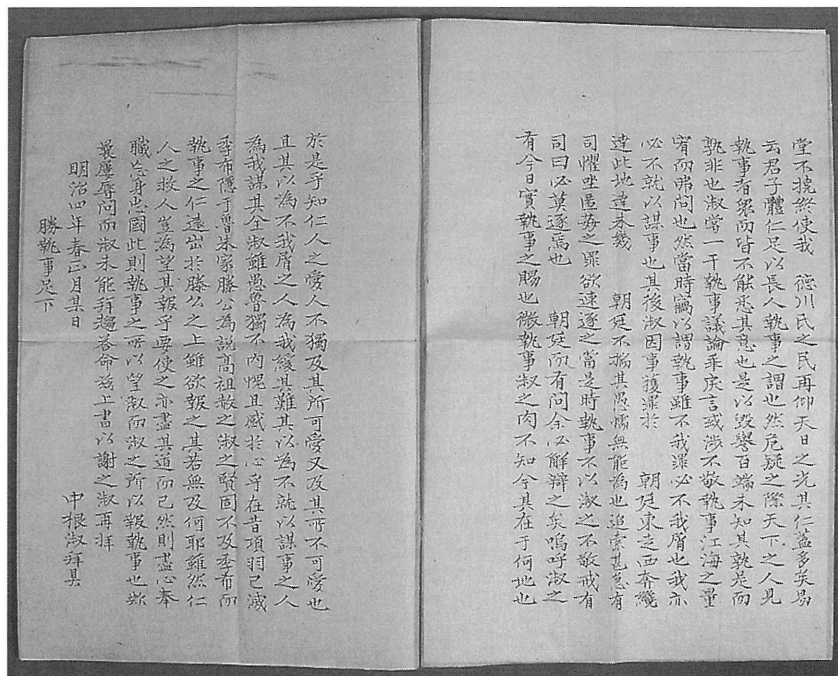
6. 明治三年九月五日条の上欄注記



9. 付属資料 ②(右) ③(左)



7. 付属資料① 中根淑上書 (1)



8. 付属資料① 中根淑上書 (2)

上勝執事書
 天之降仁人豈獨私其所可愛也已哉亦及其所不可愛也天下之廢人固衆而後仁之所施則仁之所施已有限矣必及其所不可愛而後仁之為用也始大矣夫江河之水發源東流蜿蜒曲折經數千萬里之地而後入海其間鈞漁之所遊獵舟楫之所求其利非不多也然其未為盡水之用也必築之堰堤以激之開之溝渠以導之流於數百里之外通漕沃田而後水之潤澤始廣矣淑見天下之人未嘗有如斯其大者也而余於執事獨見之矣戊辰之亂執事當軍職往來於兩軍之間天下之緊要輻輳乎一身身與國危志與事逆而執事堂

此卷初稿云云レ傷、朱依ッ野ニテ表ス
 其一生ヲトリ若クハ、數多ク々々レ止テ、ヨリニ述ト
 月日ヲ書ク事ナリ
 叔付依ッセズナリ

三日下所

堂不撓然使我 德川氏之民再仰天日之况其仁益多矣易云君子體仁足以長人執事之謂也然危疑之際天下之人見執事有衆而皆不能忘其意也是以毀譽百端未知其孰是而孰非也淑嘗一干執事議論手底言或涉不敬執事江海之量寬而弗問也然當時屬以問執事雖不我諱也我亦必不就以諱事也其後淑因事獲罪於 朝廷東之西奔幾遭此地遂未幾 朝更不稱其惡痛無能為也迎慶甚是有司懼坐區券之罪欲逐之當是時執事不以淑之不敬或有司曰必莫逐焉也 朝廷所有問余必辭辯之矣嗚呼淑之有今日實執事之賜也微執事叔之肉不知其在于何地也

於是乎知仁人之廢人不獨及其所可愛又及其所不可愛也且其以為不我諱之人為我後其雖其以為不諱事之人為我謀其全救雖愚魯獨不內愧且感於心乎在昔項羽已滅季布僂于魯朱家滕公為說高祖救之淑之賢固不及季布而執事之仁遠出於滕公之上雖欲報之其若無及何耶雖然仁人之救人豈為望其報乎要使之亦盡其道而已然則其心奉職忘身忠國此則執事之所以望淑而淑之所以報執事也淑蒙慶辱而淑未能拜趨奉命為上書以謝之淑再拜
 明治四年春三月某日
 勝執事足下
 中根淑拜呈

江戸東京博物館
史料叢書

勝海舟関係資料 海舟日記 (四)

発行日 平成十八年二月二十八日

編集 東京都江戸東京博物館
都市歴史研究室

発行 東京都
財団法人 東京都歴史文化財団
東京都江戸東京博物館

〒一三〇一〇〇一五

東京都墨田区横網一丁目四番一号

TEL 〇三―三六二六―九九一八 (研究室)

FAX 〇三―三六二六―一八〇〇二

印刷 (株) 勝田印刷

ISBN 4-924965-54-5C0021

目次

凡例

海舟日記 八 (明治二年三月二十一日〜同三年十月二十三日) …………… 1

解説 藤田英昭 …………… 126

【付録1】「海舟日記」第八冊所出の主要人名辞典 田原昇 藤田英昭 …………… 136

【付録2】「海舟日記」第八冊所出の静岡藩関係者データ …………… 144

凡 例

一 本書は、東京都江戸東京博物館所蔵勝海舟関係資料のうち、「海舟日記」第八冊（資料番号94201704）を翻刻したものである。

一 本文編は、中段を本文とし、上段に原書罫紙欄外に記された補記などを記し、下段には本文等に登場する人名を中心に註を適宜付した。なお、註に記す藩名は、版籍奉還から廃藩置県までに使われた名称を用いた。また静岡藩については、駿河府中藩の名称もあるが、ここでは静岡藩に統一した。

一 翻刻にあたり、原文書の様式を尊重するようにつとめたが、編集の都合により、原文書の形態を損なわない程度に、つぎのようにした。

- 1 日付は、便宜上ゴシック体にした。
- 2 文中に適宜、読点（・）および並列点（、）を加えた。

3 漢字は、当用漢字・常用漢字にあるものは、原則としてこれを用い、ないものは正字を用いた。また、異体字は「扌」「扌」は原表記のままとし、それ以外は当用・常用漢字に改めた。

4 宛字・誤字・衍字はそのまま表記して、右傍に（ママ）（衍力）を付した。正しい文字がわかる場合は、右傍に（〇〇力）と記した。ただし、以下の文字は「海舟日記」で常用されている宛字で、文字の用法としては的確ではないが、とくに注記はしなかった。

阪（坂の宛字） 義（儀・議の宛字）

大低（大抵の宛字） 太夫・太輔（大夫・大輔の宛字）
なお、宛字のうち「趣」の意で多用されている「赴」については、読む上での便宜上「趣」に統一した。

5 変体仮名は、原則として同音の平仮名に改めたが、助詞の「而」「得」「江」「之」は原文表記のままとした。

また、「箇所」「斯様」「一箇」などの「カ」「コ」を表す
ケは残した。

6 合字は平仮名にあらためた。

7 欠損、または判読不明の文字は、□□(字数分)、「」
(字数不明)で示し、触損などは右傍に(虫損)(欠損)
と記した。

8 踊り字は、漢字は「々」、平仮名は「ゝ」、片仮名は
「ヽ」を用いた。大返しは「く」(字数分)を用いた。

9 本文中の補記や加除訂正は、原型を活かすようにつと
め、当該箇所の訂正あるいは削除された文字に見せ消ち
「々」を付した。

10 朱書は、右傍に(朱書)と記した。

一 巻末に、本書の解説を付した。

一 本書の編集は、左記の者がおこなった。近松鴻二(当館
学芸員) 田原昇(当館専門研究員) 高山慶子(同)

藤田英昭(中央大学大学院生) 大沢恵(学習院大学大学
院生)

一 なお、当館では、「海舟日記」を含む勝海舟関係文書の
マイクロフィルムによる閲覧を実施している。「江戸東京
博物館史料叢書 勝海舟関係資料 文書の部」(平成十三
年刊)に、「江戸東京博物館所蔵勝海舟関係文書 マイク
ロフィルム版目録一覧表」を付したので、あわせて利用い
ただきたい。